

野田の地形と古墳文化

(のだのちけいとこふんぶんか)



関宿城下付近の航空写真

航空写真を見ると、野田地方は下総台地が半島状にのびた先端部分に位置することが判ります。関東平野を二分する利根川は、関宿地区で下利根川と江戸川に分かれ、二つの大河川とそれぞれに広がる広大な下利根川低地・中川東京低地が台地を囲んでいます。

このような地形は、約 2000～1500 年前に利根川が大宮台地西側の荒川低地から東側の加須(かぞ)低地へと移動して形成されたと考えられています。その結果、渡良瀬川だけの頃に比べて 10 倍以上の水量が供給されて、近世に至るまで著しく沼沢地(しょうたくち)が卓越(たくえつ)するようになり、野田地方と各地が河川を通じて舟運(しゅううん)で結びつくことを容易にしたのです。

野田地方に他地方の影響が顕著になるのは、3 世紀末頃の古墳時代初頭です。南関東地方の影響を受けた土器が、上三ヶ尾(かみさんがお)の宮前遺跡・堤台松山遺跡の方形周溝墓(ほうけいしゅうこうぼ)や砂東(すなひがし)遺跡・三ツ堀(みつぼり)遺跡の集落などで出現するのに続いて、飯塚遺跡などで近畿地方、桜台遺跡・南新田遺跡などで東海地方の影響を受けた土器が使われました。同様な遺跡は松戸・柏・我孫子(あびこ)市域にも分布し、野田地方は古墳時代前期における東葛飾(ひがしかつしか)地域の交流の中心地であったようです。

一方、古墳時代後期には、比企型(ひきがた)や常総型(じょうそうがた)と呼ばれる土器の使用が拡がり、北武蔵(きたむさし)・常陸(ひたち)地方とも交流が進んだようです。6 世紀後半には、下総型(しもうさがた)と呼ばれる円筒埴輪(えんとうはにわ)が埼玉県春日部市(かすかべし)や茨城県常総市域などの他、関宿城跡・香取原(かとりばら)古墳群や市川市法皇塚(ほうおうづか)・明戸(あけど)古墳などにも採用され、分布の中心である印旛(いんぱ)地域から製作工人の移動が想定されています。また、6 世紀後半～7 世紀前半には、筑波片岩(筑波石)や貝生痕凝灰岩(かいせいこんぎょうかいがん)・房州石(ぼうしゅういし)などの石材が下総・武蔵地方の横穴式石室や石棺(せっかん)に使用され、舟運による遠距離運搬も行われました。さらに、関東地方には珍しいドーム状の窮隆式(きゅうりゅうしき)の構造をもつ岩名古墳の横穴式石室は、茨城県境町金岡八龍神塚(はちりゅうじんつか)古墳や香取市城山 6 号墳と共通し、広く技術交流が行われたと考えられます。

このように、野田地方はその特徴的な地形を活かして、舟運によって広く各地との交流を深め、次第に東関東地方における交流の結節点の役割を果たしていったと考えられます。

《詳しくは…》

* 野田市史編さん委員会編 2005 『野田市史 資料編 考古』 野田市

三ツ堀遺跡出土土器



宮前遺跡航空写真

